

忍者なんて

いなかつた

添牙いろは



ハイ！ 私、日向見学園高校三年A組鷹池……じゃなかった、輝山裸足！ こない

だ、こーちゃん——輝山工祐こうすけくんと結婚したばかりの新婚さんだよ！

……ん？ このコ？ ようやく寝たからしばらくこうして抱いておくよ。ベビーベッドに移したらまた泣き出しそうだし。ああ、このコの名前は祐樹ゆうき！ 今年で丁度一歳になるの。正真正銘、私とこーちゃんの愛の行為の結晶だよ！

私とこーちゃんとの間には色んな可能性が渦巻いてたと思うのよね。でも、今の私が最高のハッピーエンドだって断言できる。だって、これ以上の幸せなんて思いつかないもの！

ということで、今回は私たちの馴れ初めの話を聞いて欲しいな。勿論、こーちゃんとは出逢った瞬間からずっと仲良しだったけど、その関係の決定的な変化は中学二年生の頃だったと思うの。

だから、お話の舞台は、五年前にタイムスリップ！ ちよつと恥ずかしいけど……こーちゃんとの思い出なら、誰に見られても平気だよ、私！

忍者なんていなかった

無料サンプル版

添牙いろは

1

最近、私はお布団が大好きになった。

元々こんなにグースカ寝てる性格じゃなかったんだけどな。でも……布団の中でできることが睡眠だけじゃない、って知っちゃったからねっ♪

今夜も少し時間は早いけど、もうベッドに潜り込んでしまった。そして、うつ伏せで枕に顔を付けると、私は呪文のようないつもの言葉を呟く。

「……こーちゃん……」

トクン……トクントクン……トクントクントクントクントクントクン……！

あつという間に私の鼓動はマックスハート！ 閉ざした瞼の裏には見慣れたこーちゃんの写真が写し出される。そして、腰の周りには……こーちゃんの腕が、こーちゃんの肩が、こーちゃんの鼻頭が……あ……ああ……あはあ……♡

着たばかりのパジャマだけど、早くもモゾモゾと脱ぎ始めてしまう。中に穿いてたパンツも一緒に。邪魔なものを足下にくちゃっと押し込むと、お尻の上に毛布が被さってるのが感じられる。私……アソコ丸出なんだ……！

股間に手を入れやすいように少し足を開いて、その中央を走る筋の間にプニッと指

を挿^い入れてみる。

「っ……っ！」

この瞬間が、いつもドキツとする。そして、嬉しい瞬間でもある。だから、私はさらなる燃料を投下する。

「こーちゃん……っ！」

枕の中にモゴモゴと囁くと、それだけで喉から胸を伝ってアソコまで脈打っていくみたい。

今日はどんなプレイをしよう。うーん……久々に、基本に戻ってみようかな。

私がこーちゃんに初めて抱かれた日。それは、この前の中間試験の答案が出揃った日。五教科で四〇〇点取れたらパソコンを買ってくれる、とお父さんとの約束を取り付けて、こーちゃんと頑張って勉強して……あと三点だけ足りなかった、という絶望のドン底に叩き落とされた日。私は悔しくて、授業が終わるや否や、秘密の隠れ場所に逃げ込もうとしていた。

学校の最上階——屋上への扉が備え付けられた階段室。そこに用事がある人なんてなかないない。だから、私は悲しくなったらここに来て、独りで泣いていた。

その日も独りで泣こうと思っていたのに……まさか追いかけてたなんて！

「早まるな————ッ!!!」

というトンチキな叫び声と一緒にこーちゃんが、頂上まであと一歩だった私の後ろからしがみついてきた！

後で聞いた話だと、私が屋上から投身自殺するのかと思つて必死に止めに来たらしいけど……そんなの判るわけじゃないじゃない？ いきなり掴まれてビックリしちゃつて、無我夢中で正体不明の追跡者を無理矢理引き剥がすと、階段から振り落としちゃったわ！

でも……今になって思い出すと、それが何だか嬉しくて、こーちゃんの腕の感触が忘れられなくて……この日を堺に、私のオナニーライフが始まったの。だから、私の妄想はこれが基本。本当はこの後保健室に運ばれたこーちゃんに付き添って行つたけど……そんなんじや面白くない。今回のこーちゃんは、私から離れるどころか、私を階段に叩き伏せちゃう！

「こ……こーちゃん!? ナニするの!?!」

(鷹池……こんな人がいないところに僕を誘つておいてナニをするか、だって?)

「誘つたワケないでしょ! 今すぐ放して!」

でも、こーちゃんは離れてくれない。それどころか、私のスカートの中に手を差し入れてくる。そして、内腿をサワサワサワ……

「うっ……ん……こーちゃん……やめてよ……」

こーちゃん私の懇願も聞かず、股の危ういところをスベスベさわさわ撫で続ける。その手つきは、最初は膝の辺りだったけど、だんだん上がってきて……

「ふうんっ！」

ペチヨ、つてアソコに触られちゃった！

（鷹池、お前……ノーパンだったんだな）

「ちがつ……いつもは穿いてるもん！ 今日……えーと……す、水泳の授業で！」
ということにしておこう。

（そんなこと言って、本当はワザと忘れてきたんだろ？ それで、触って欲しいからこんな人のいないところに僕を誘き出して……）

「莫迦じゃないの!? これ以上やったら——！」

くにゅ。私の指が敏感なところに触れてしまった。

「あう♡」

（これ以上やったら……どうするんだ？）
くにゅくにゅくにゅ。

「あつ、あふ……やふ……」

い……いい……ココ、気持ちいい……♡

くうううん……♡

（これ以上って……こんなことか……？）

「だっ、だめ……っ、そんな汚いトコ舐めちゃ……みなっ……見ないでえ……」
そう言いながら、私は指でぴろんと広げる。風通しが良くなつて、本当にこーちゃんに見られてみたい！

分かりやすくなったクリトリスにこーちゃんの舌が襲い掛かる！　ぬるっ、ぬるっ、とした肌触りが、一番気持ちいいところばかりを攻め立てる！

「あっ、あっ、あんっ、あっ、いつ、絶頂……絶頂……絶頂……こーちゃんの舌で……ああああああっ♡」

ぴくんっ！　腰が釣り上げられるような感覚。ぴくっ、ぴくっ、ぴくっ……ふああ……気持ちいい……。

ああ……絶頂ちゃったんだ……。また、こーちゃん……。

一応、クラスの男子は殆ど全員試してみたんだけどね。どうも、こーちゃんでない
と絶頂ないみたい。

そんなわけで、毎晩こーちゃんばかりにお相手してもらっちゃってる。それなのに飽きが来ないのは……多分、男子の中でこーちゃんが一番仲良しで、よく知ってるってことと……実際に腕に抱かれたから……なんだろうな。さすがに他の男子とは妄想のリアリティが違うわ。

布団の中から手を伸ばしてティッシュの箱から一枚引っ張り出す。それでペトペト

したところを拭き取って……普通のお布団の使い方に戻そうかな。お腹が冷えると良くないから、隅に追いやったパンツとズボンを穿き直す。それじゃ……おやすみー……。一度絶頂^{イク}と眠くて仕方がないや……。

今度は安らかな中で、こーちゃんの腕に抱かれる妄想。

(さつきは悪かったな。鷹池が可愛いから、つい……)

「もう……こーちゃんの……莫迦♥」

こーちゃん……こーちゃんったら……もー……んー……。

初めてこーちゃんをおか^カズにした時は、そりやあ罪悪感とかあったもんだよ。どんな顔して学校で会えばいいのか複雑な気分だったし。でも、いざ登校してみたら……。「よう、鷹池。今週のゴムマガ見てくれよ！ 今度出るって噂のレボリューションのローンチに、凄いの混ざってたぞ！」

「あ、おはよう、こーちゃん。毎週ありがとうねー」

私もこーちゃんも、ずっとこんな感じ。エロい妄想しようがしまいが、ビックリするほど普通の会話を交わしてる。

それで、何の心配も要らなくなったからかな。あの階段での一件以来、ついこーちゃんのことばかり気になっちゃう。だって、こーちゃんの一挙一動が私の妄想になる

かもしれないんだもの。ネタの宝庫だよ！　こーちゃん、この新ハード買うのかな？
それで、『買ったからうちに来ないか？』なんて自宅に呼び出されて……実は、私の
カラダが目当てでした！　って襲われちゃったり!?　ウン、今夜はコレでイこうか
な♪

ここんところ、ずっとこーちゃんのことばかり考えてるから、もしかして、これが
……恋!?　なんて思ったこともあったけど……こんなカラダ目当てみたいな恋は……
……やだなあ……。

私は授業が始まるまで、こーちゃんに借りた雑誌をガッツリ読み耽ることにした。
勿論、新しいゲーム機とやらが楽しみ、ってこともあるけど……深夜の妄想こーちゃん
に語ってもらうには、私自身がその情報を身につけないといけないからね♪

さて、今日はフルで授業が埋まって放課後の時間はあまり無い。それでも、ミミ
ちゃんや米原さんとコンビニくらい寄っていかうかー、なんて話してた。でも、これ
じゃあ……中止かな。家を出る時は気持ちのいい秋晴れだったのに、午後の授業が始
まる辺りから空模様は驚きの黒さに早変わり。道草どころではなく、雨が降り出す前
に帰れますように！　と願うばかりだよ。

でも……そんな祈りの甲斐もなく、最後の授業が終わると同時にドバーっと物凄い

雨が降り始めてしまった。

置き傘組は『こんなこともあるのかと！』とか言いながら悠々と下校していったけど……むう、いいもん。きつと通り雨だろうし、少し待てばすぐ止むもん！

最初は女のコ同士で集まってバカ話してたけど、そのうち教壇の辺りが騒がしいことに気がついた。

どしたんだろ？ って人集りを覗いてみると……あら、面白そうなことやってるじゃない。中村君が教壇の上に置かれた段ボールに手を突っ込みながら何やら独り言を言っている。

「柔らかいけど……ザラザラしてるな」

これに対して周りの人たちが

「スポンジか？」

「形はどんなのよ」

やんややんやと全員参加で大賑わい。どうやら箱の中身を手探りで説明しつつ、周りの人たちがその中身を当てる、というゲームをやってるみたい。

「ああ、もしかして、今日の給食で出たパンじゃね？」

「おおー、正解だー！」

出題者が正答者に拍手を送る。

「てか、ちゃんと食べよな。気持ち解るけど」

うん、あのパン、スカスカなのに硬くて美味しくなかったよね……。私はちゃんと食べたけど。

「それじゃ、次の挑戦者は——」

「あ！ あたし！ あたしやりたい！」

隣で見ていた米原さんが名乗りを上げた。こうして、私たちもこのゲームに参加することになったのでした。

その後何問か出題が続いて、ついに私が挑戦者——つまり、箱の中身を他の人に伝える番になった。変なもの入ってなければいいけど……。そろそろみんなこのゲームに慣れてきて、如何に普通じゃないモノを入れてやろうかと必死になってるもんなあ。目を閉じたままスタンバってる私の横で、何やら異様に時間を掛けてるみたいだし。

でも、まあ、これはお遊びだし、楽しみではあるよね。出題者の大西君の『それは、どうぞ！』って合図と共に、私は箱の中に手を入れる。

「えーと……どこかな……？ あ、コレかな」

箱の底に置いてあるかと思ったら、宙に浮いてる感じ。グミみたいに柔らかいけど、それにしても大きすぎる。しかも何だか生暖かい。

「何だろ？ 変に柔らかいけど……」

手触りを確かめてたら、ピクっ、ピクっ、って震え始めたよ。何コレ、生き物！？
しかも、だんだん膨らんできてるんだけど……！！

「それに、何かペトペトしてる……」

噛み付かれたりしないかと恐る恐る指の位置を変えてみると……

「端のあたりに柔らかい毛が生えてて……何コレ!？」

得体のしれない悪寒を確定付けるようなざわめきが、私の耳に届いてきた。

(マジで……？ 本気で入れてんの……？)

(アレだったら、シャレにならんくない……？)

(止めた方がいいって……！)

ハッとして私は顔を上げる！ すると頭の上には……

「お、おう……鷹池……」

半笑いのこーちゃん。そういえば、こーちゃん、箱にピッタリと寄り添ってるね。
具体的にはベルトの下辺りが。

出題者が大西君からこーちゃんに変わっていたことを知って、私の中の悪寒もすー
っと消えていった。気が緩んだ私はつい――

「良かったあ……こーちゃんので……」

硬くて熱いものをきゅっと握りながら、無意識にそんなことを呟いていた!!

これには室内も静まり返ってしまう。あ…………えと…………これは…………その…………変な意味じゃ…………!!

「も、もう! 汚いモン触らせないでよね! 私っ、トイレで手、洗ってくるから!」
ゲームを放棄して戦線離脱! うわあ…………私ってばもう、ナニ言ってるんだか!

早足で教室から逃げ出して、女子トイレに到着。すぐさま洗面台の前に立って、左手で蛇口をひねる。でも、右手を流水にさらそうとした途端…………手の平に竦った熱が私を引き止める。

私…………握っちゃったんだ…………こーちゃんの…………アレ。私の手の中で大きくなったアレ…………絶対アレだよね…………いわゆる…………男のコのおちんぼ…………ってヤツ…………!

指をにぎにぎしてあの時の感触を思い出してみる。わあ…………結構大きかったんだけど…………。セックスって、アレを…………あのおちんぼをお陰に挿入れるんでしょ? そりゃ、痛いに決まってるわ。お股裂けちゃうよ!

鼻を近づけて匂いを嗅いでみる…………。あんまり残ってないけど、明らかに私のとは違うものが混じってる…………。これが…………おちんぼの残り香…………?

何だか堪らなくなつて、私はそのまま手で口を塞いでしまう! こーちゃんのおちんぼとの間接キス!? ペロっと舐めてみるも、さすがに肌の味しかしい。う…………

こーちゃん……こーちゃん……!!

私はキュツと蛇口を止める！ もう我慢できないよ！ 個室に飛び込んで中から鍵をかけると、便座にも座らず立ったままスカートの中からパンツをずり下ろした！

情けないガニ股になってアソコを開き、手の平全体でプックリした二つの山を包み込む！ あっ……ああ……私の……私のおまんこがこーちゃんのおちんぽに触れられる……！

……うわっ、私のアソコ、何だか凄いいことになってるんだけど!? いま触り始めたばっかなのに、既にベツチヨベツチヨのヌルツヌル！ パンツ汚しまくってるでしょ、コレ！

だから、手の平で撫でてるだけなんかじゃ抑えきれない！ 私は足を広げたまま便座に腰を下ろして、指を濡れた割れ目の中に潜り込ませる。ソコは待ってましたと言わんばかりにヌルヌルと私を飲み込んでしまった。

クチュクチュと掻き回しながら、私はあの感触を思い出す。おちんぽ……こーちゃんのおちんぽ……！ アレが私の^{なか}膣に^は挿入^いってるんだ……！

さすがに指は挿入^いれたくないけど、膣に挿入^いれるのって……どんな気持ちなんだろう……？ 最初は痛いけど、慣れたら良くなっちゃうのかな……？ こーちゃんのおちんぽで……！

裸のこーちゃんに抱かれる裸の私。私の上に覆い被さって、一生懸命腰を振ってる……！ その度に私の中に快感が駆け巡って、そして……ドピュッ……って……！！

ビクンッ……！！ ガクガクガク……ガクガク……！！

便座からずり落ちそうになるほど、私は激しく身体を震わせていた。あ……ああ……
……そういえば私……今までこうして普通にセックスする妄想はしたことがなかったなあ……。いつも私を楽しませてもらうばかりで、こーちゃんに気持ちよくなってもらってなかった……。おちんぼをおまんこで咥えてあげれば、こーちゃんも気持ちよくなれるんだよね……。？ はあ……。私、こーちゃんとセックスしたいなあ……。♥

……ってナニ考えてるの、私!? あまりの生々しさにようやく我に返ったわ！

うう……。私がこーちゃんと……。セックス……。？ 子供とかできちゃったらどうするのよ！ でも……。でも……。うう……。どうして嫌な気持ちがないのよ！ 裸になって抱き合うんだよ!? 嫌悪感とか拒否感とかあっていいでしょ！ 何でこんなにすんなり受け入れられちゃってるのよ!!

そしてその夜……。日課のオナニーで、私はとんでもないことをしてしまった。意識

的に避けていたあの言葉。どんなに名前を呼んだとしても、アレだけは言いたくない、言っちゃいけない……そう自分の中で決めていたのに。

私から言うつもりはなかった。それなのに、こーちゃんのことをぼんやり考えてたら、脳内こーちゃんが私にこんなことを言うんだもん。

(鷹池……僕、お前のことが好きなんだ！)

そう言われて、うっかり私も口に出してしまう。

「嬉しい……こーちゃん。私も、こーちゃんのこと……大好き！」

……あーあ……言っちゃったー。こーちゃんのこと、好きだって。……そっかあ、やっぱり私、こーちゃんのこと、好きなんだなあ。キツカケはカラダかもしれないけど、私、こーちゃんと結婚して、子供と三人で暮らしたい、なんて考えてるもの。輝山裸足、かあ……。うわあ……ナニこの高揚感。子供の名前どうしよう、なんて迷い始めてるもの。

(名前の前に……先ずは、子供を作らないとな)

「うん、ありがと……こーちゃん♥ 私、頑張って元気なこーちゃんの子供、産むからね……♥」

この日、私は初めてオナニーしながら寝てしまった。いつの間に落ちたのかも判ら

ず、気づいたら夢の中にいた。勿論、こーちゃんとセックスして、子供が産まれる夢。頑張ったな！　ってこーちゃんは褒めてくれたんだけど……そこで私は重要なことに気がついたんだ。

「名前!!」

まだ名前考えてなかった！　って飛び起きた時は……もう朝日が昇ってた。しまった、っってお腹に手を当ててみると、そこは素肌で、とつてもヒンヤリ。うう……お腹の薬とか飲んでおいた方がいいかなあ……。

起きるには少し早いけど、二度寝する気にはなれず、私は机に座って漢和辞典を広げた。いつ子供ができてもいいように、名前はしっかり考えておかないと！　男の子と女の子と、両方ね！　うーんと……やっぱり私たちと同じ漢字は入れたいよねえ……。

で、名前候補をいくつか挙げたところで満足気に登校したのだけど……その途中でもっと重大なことに気がついた！

私、こーちゃんのおちんぽ握っちゃったんだよ！　しかも、それで良かったとかゆっちゃったし！

昨日、あの後教室に戻ってみるも、私がオナニーしてる間に部屋の中はすっからか

ん。雨も止んでたし、みんな帰っちゃったみたい。こーちゃんも含めて。寂しかったのが半分。顔を合わせづらかったので助かった、つてのが半分。

で、その翌日なんだよ、今日は……！　うわわつ、どーしよ、私！　今までの妄想とかじゃなくて、ホンモノのこーちゃんのものに触っちゃったんだよ！　それも直に！！　しかも、嬉しそうにあんなコトを……！

教室入ったら変態扱いされないかな!?　うう……何を言われてもいいように、覚悟しておかないと！

……と気張って教室の扉を開いてみたものの……

「よう、鷹池。貸してたゲームマガ、読んだか？」

拍子抜けするほど普通……。みんなの様子も、普通……。まるで、昨日の痴態はなかったかのような日常。本当に夢だったのかな？　と不安になるくらい。

だからといって、『昨日こーちゃんのおちんぽ触ったっけ?』なんて訊きようもない。周りのみんなが無かったことにしてくれてるんだし、それに甘んじるべきでしょうね。

だから――

「あ、もう少し読みたいからまだ借りていい？」

気になる真相を気にしてないフリをして、いつも通りの自分に徹することにした。

でも……あのリアルな感触は忘れようもない。リアルなこーちゃん。リアルなおちんぼ。そして、私のこーちゃんへの本当の気持ち。私の中のこーちゃんは、もうただの肉欲の化身には戻ってくれない。

胸やアソコに優しく触れながら、『好きだ』『愛してるよ』って私に甘い言葉を囁くようになってしまった。それを私は受け止めて『ありがとう』『私も愛してる』って囁き返してるし。

それに、これまでのような、色んなところでこーちゃんから無理矢理襲われる、つて妄想もできなくなっちゃった。代わりに、高校生、大学生、社会人、と色んな時間軸、でえっちするようになっていた。場所は、大抵自宅かホテル。ラブホには入ったことがないから実際は知らないのだけど、その手の漫画とかで頑張ってイメージしてる。こーちゃんと一緒に、あの大きなベッドで……ああん……♡

子供の名前も決まった。男の子だったら祐樹ゆうき。女の子だったら裸華はだか。私は主婦になつて子供の世話をして、こーちゃんはゲーム会社で凄腕プログラマとして活躍してる。で、子供と一緒に、『これがお父さんが作ったゲームなんだよー』って言いながら遊ぶんだ。

で、平日は疲れてるからこーちゃんにはゆっくりしてもらおう。でも休日は、子供

を早く寝かせて……大人のゲーム♥ この時だけは私も母から女に立ち戻って、旦那様のことを『お父さん』じゃなくて『こーちゃん』って呼ぶの♥

(裸足、そろそろ二人目欲しくないか?)

「うん、こーちゃんの子供なら、何人でも欲しいよ♥」

そこに祐樹ちゃん(もしくは裸華ちゃん)が起きてきて……きやー! どうやって誤魔化そう! ……とか、妄想は留まることを知らず。未来への想いは膨らむばかりで、そのまま抑えこむのが難しくなってきた。

みんなやこーちゃんが折角なかつたことほしくにしてくれたのに……私は堪え切れずに自ら穿り出さずにはいられなかった。

**忍者なんていなかった
無料サンプル版**

添牙いろは

Twitter: <http://twitter.com/soekiba>

Facebook: <http://www.facebook.com/soekiba>

イラスト

ターヤ

発行

2015/04/29 Ver. 1.0

空色書房

<http://soekiba.net/>

どこでも服を脱ぎ散らかす
裸族少女・きの子
愛する男の子供を孕みたがる
年中発情期女・鷹池
この二人が一人の男を取り合う
やたらとエロいライトノベルです

裸族忍者シリーズ

<http://soekiba.net/ninja/>



彼女は忍者をまちがえている

部活の再建のために近づいてきた
輝山の後輩・きの子。
だが、彼女の有り様は謎めいており
とても部のためだけとは思えなかった。
彼女に呼応するように
幼馴染・鷹池も動き出し……



とある忍者の恋色絵巻

『～まちがえている』の
きの子視点の物語。
水面下で行われていた
鷹池との罅迫り合いと
裸族としての脱ぎっぷりが
彼女の口から語られる！



忍者は浮気を許さない

『～まちがえている』の
パラレルワールド的物語。
些細な行動の食い違いから
彼らの歯車は狂いだし……！？
三角関係は痴情の限りを尽くす
泥沼へと嵌り込んでいく！



詳しくはWebで

<http://soekiba.net/astra/>



僕と私の The diary of Sleeping under the stars for Ours 露出日記

どこか
野外で繋がる
はだか
露出の絆—

スピンオフでも
野外で全裸!

わたしとあなたの
露出交換日記

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/outdoor/>



ゲーム会社でうった
ゲーム

ゲームって
.....ナンだ!?

ただシナリオを追ってだけで
ゲームと呼べるのか?

ボタンを連打するだけでゲームなのか?

そもそも、ゲームとは一体何だったのかを
考える一冊です。

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/game/>



空色書房

Sleeping under the sky